

平安遷都をささえた官寺・常住寺

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

桓武天皇の新たな造都事業において、寺院をどのように扱うかは大きな課題でした。実際に、長岡京においては既存寺院を京内に取り込んで整備しており、平安京では京内寺院は東寺と西寺以外の造営を認めていません。山背遷都にあたって、政局に大きな影響力をもっていた南都諸寺院の移建は許されなかったのです。

延暦13年(794)に遷都された平安京は、厳密な造営計画に基づいて造営されており、形態だけでなく諸施設もシンメトリーに配置する象徴性の強い都でした。東寺と西寺も九条大路に面して左右対称に造営されています。その造営過程をみると、延暦16年に「造東大寺長官」や「造西寺次官」の存在が文献史料から確認でき、延暦19年には東西二寺の堂を構えるために、巨木の伐採を許しています。延暦年間に東西二寺の造営が進められていたことは間違いありません。

しかし、桓武天皇は東西二寺の竣工をみることなく崩御します。実際に、東西二寺が官寺として機能し始めるのは嵯峨天皇の時代になってからで、弘仁4年(813)に東西二寺において初めて国家鎮護の法会が実施されていることから、このころ東西二寺の金堂院が一応の完成をみたと考えられます。造



「野寺」墨書土器(昭和54年出土)

営が大きく遅れた事実は、東寺東築地の築地版築の下層で、遷都直後の土器を包含する川を発見したことからも窺えます。東築地の造営にあたり自然河川を制御する必要があったこと示すとともに、東寺の造営が桓武朝より遅れることを考古学的に証明できたのです。

では、東西二寺ができるまで平安京の寺院政策はどのようになっていたのでしょうか。東西二寺にかわる初期平安京の官寺としての機能を担った寺院、それが常住寺(野寺)です。常住寺は、平安遷都から2年後である延暦15年11月

の段階で、新鑄の隆平永寶を南都七大寺とともに施入されています。また、長岡京期の延暦5年(786)に桓武天皇が志賀山中(滋賀県大津市)に創建した梵釋寺とも関係が深く、弘仁11年(820)正月には常住寺で鑄造した四天王像を梵釋寺に遷し安置しています。常住寺の本尊は桓武天皇御持仏の薬師如来で、遷都の時に移されたとの言い伝えもあり、桓武天皇と縁の深い寺院であったことがわかります。平地寺院である常住寺と山林寺院である梵釋寺がセットとなって、桓武朝仏教の中心的役割を果



北野廃寺瓦積基壇（昭和52年調査 東から）

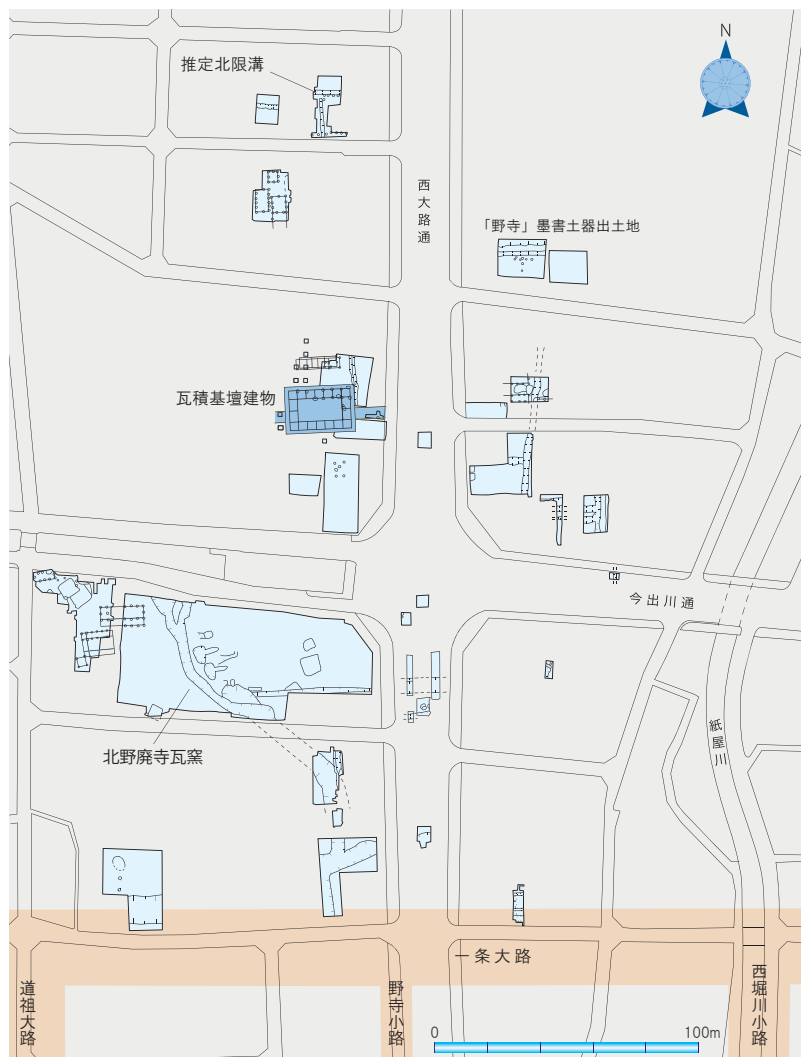
たしたことは間違いありません。ところで、常住寺の位置については、北野白梅町の交差点付近に所在した北野廃寺から、「野寺」の墨書を施した平安時代初期の土師器が出土していることが手掛かりとなります。北野廃寺は、創建が7世紀第1四半期に遡る北山背最古の寺院で、『日本書紀』推古天皇31年（623）条にみえる「葛野秦寺」と考えられますが、『広隆寺縁起』などによれば平安遷都の時に寺地が京内に取り込まれたため、寺籍を移して広隆寺（蜂岡寺）と統合したようです。北野廃寺の旧伽藍は官に接收され、右京北郊に接した新たな官寺である常住寺となったのでしょう。北野廃寺の正面にあたる平安京の南北小路が、「野寺小路」と呼ばれるようになったのも、このような由来からだったのです。

なお、常住寺伽藍の実態は、元慶8年（884）3月の火災記事より塔・金堂・講堂・鐘楼・経蔵・歩廊・中門があったことがわかります。発掘調査で明らかになった北野廃寺の建物は、瓦積基壇建物とそれ

に取りつく東回廊の一部で、平安時代に入ってから被災しており、先の元慶期の火災が想定されています。ただ、瓦積基壇に使用された瓦は7世紀のものであり、瓦積

外装の盛行がやはり7世紀後半から8世紀であることから、常住寺は北野廃寺の伽藍をそのまま使用していた可能性があります。

北野廃寺では8世紀末になると、勅旨所系軒瓦が北野廃寺瓦窯で焼かれ、長岡京からの搬入瓦と西賀茂瓦窯を中心とする造宮使（造宮職）所管の瓦窯からも多くの瓦が供給されます。これは、東西二寺が造営されるまでの官寺常住寺として、急ぎ伽藍整備されたことを示しています。常住寺は桓武天皇が初期平安京の精神的支柱としての機能を期待し、在地寺院を再整備して伽藍を整えた特殊な寺院だったのです。（網 伸也）



北野廃寺発掘調査位置図（1:2000）【『飛鳥白鳳の薨』2010 一部加筆】